令和3年3月発行

地域教育情報紙 中北.com チュウホク ドット コム

山梨県教育委員会　中北教育事務所
地域教育支援スタッフ
横森　一哲
雨宮　靖子
韮崎市本町4－2－4
TEL　0551-23-3046

6

中北の地域社会（COM munity）の心の交流（COM munication）をめざします

中北.com　no.6　コンテンツ

p1　中北地区地域教育推進連絡協議会
p2　中北地区地域教育推進連絡協議会・落合小
p3　あけぼの支援学校・甘利小
p4　田富南小

地域で支える子どもの健やかな成長　中北地区地域教育推進連絡協議会

1月28日（木），第2回中北地区地域教育推進連絡協議会が，数野 保秋 同協議会会長（甲府市教育委員会教育長）をはじめとする各委員出席のもと，北巨摩合同庁舎で行われました。十分な人と人との間隔を確保するため会場を２つに分け，その２つの会場をオンライン会議アプリZoomでつなぐなど，万全の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を行って実施された今回の協議会では，事務局から令和２年度の事業経過の報告および令和３年度の事業計画の説明，また甲府青年会議所副理事長　萩原　亮　様からは同会議所の来年度の事業についての情報提供をいただきました。その後，「地域全体で子どもの健やかな成長を支えるため，教育論議を高めるとともに，地域の教育力の向上を図り，学校・家庭・地域社会の連携と融合を促進する」という本協議会の目的に基づいて人権教育指導研修が行われ，山梨学院短期大学保育科教授 樋川 隆氏から，現在，社会全体で解決を図るべき最重要課題と言われる児童虐待の現状と課題についてご講演いただきました。以下にその講演内容の一部をご紹介します。

児童虐待の現状

子どもに対する虐待について，児童虐待防止法第2条では，①身体的虐待 ②性的虐待　③養育拒否（ネグレクト）④心理的虐待，の4つの行為類型が規定されている。令和元年度中に全国215か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は前年度比21.2%増（33,942件増）の193,780件（速報値）で，過去最多。主な増加要因として，児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力がある事案（面前ドメスティック・バイオレンス）について警察からの通告が増加したことが考えられる。また児童虐待相談の内容別件数の内訳で最も割合が多かったのは心理的虐待，次が身体的虐待となっている。一方，山梨県の状況について，同年度の山梨県内の児童相談所における児童虐待相談件数は1,218件，市町村相談件数も688件とこちらも過去最多。また山梨県でも全国同様，心理的虐待の割合が一番多く，虐待相談の経路別相談件数では警察等からの通告が一番多いことと考え合わせると，子どもがいるところで保護者同士が争っている様子が浮かび上がる。また統計によれば，2018年度に山梨県の児童相談所が対応した児童虐待相談後の処遇について，施設入所や里親委託となった児童の割合は６％程度，残り9割以上の児童は在宅での処遇となっており，地域等で家にいる子どもの様子を把握する必要があると言える。

山梨学院短期大学保育科
教授　　樋川 隆氏

虐待から子どもを守る

１）虐待に気づく－子どもの「いつもと違う」「何か変だ」に気づくところからはじまる。児童虐待に特徴的な外傷は，通常に遊んでいてけがをするような部位ではないところ，例えば太ももの内側や脇，背中など，身体の裏側，内側，背中側にある。また子どもの表情が乏しい，触られること・近づかれることをひどく嫌がる，家に帰りたがらないなどの異変や違和感は重要なサイン。現場の先生方が「あれ？」と感じたことは，大事に確認した方がいい。

２）児童虐待の早期発見と通告―児童虐待防止法第5条は，学校の教職員，児童福祉施設の職員，医師，看護師，警察官など職務上児童虐待を発見しやすい立場にいる者に対し，児童虐待の早期発見のための努力義務を，また同法第6条では，児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者に対し，速やかに福祉事務所若しくは児童相談所に通告する義務を規定している。ここで大事なのは，確証がなくても，児童虐待が疑われる場合は，迷わず通告すること。保護者との関係性よりも，子どもの安全，何より子どもの命を守ることを最優先にすることである。また学校においては，校内にチームを作り，担任等が一人で抱え込むことがないように，組織的に対応することが大事。

３）地域における連携―保護者がない，または保護者に監護させることが不適当であると認められる児童（要保護児童）の適切な保護，あるいは保護者の支援が特に必要と認められる児童（要支援児童）等への適切な支援を目的として，地方公共団体により設置される組織が要保護児童対策地域協議会（要対協）である。山梨県においては，これまで全ての市町村に置かれていた要対協に加え，2020年11月には県版の要対協である「子どもを守る山梨ネットワーク会議」が設置された。市町村の担当課，児童相談所，福祉事務所，医療機関，教育委員会，学校，警察等，子どもや家庭の支援に関わる諸機関が構成員となり，関係機関間の共通認識と連携の推進，各機関の実務者のスキルアップ，個別ケースの検討などを行い，地域全体で子ども達や家庭を支援する体制が整備されている。

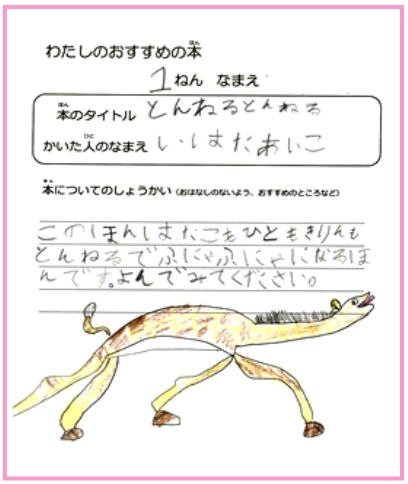
****

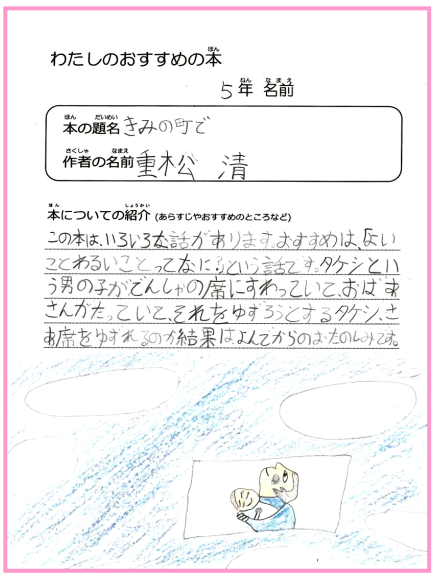
講演後には，「通告義務があることを教えてもらってよかった。できるだけ早く発見し，早く対応する，という先生の言葉を忘れないようにしたい。」「虐待の実情はなかなか知る機会がないので，今回はよい勉強になった。見極めが難しい面があることがよくわかったと同時に，虐待だと判断するための基準がわかったので，支援していく上で活用していきたいと思う。」などの感想が寄せられ，「未来の子ども達の今を守るのは，私たち大人の役割です。」と語る樋川教授のお言葉通り，今回の講演会が，参加者それぞれがその立場から，子ども達の健やかな成長のためにできることを考える機会となりました。

樋川教授のご厚意で，当日の講演の様子を動画で公開することができることになりました。中北教育事務所のホームページ，あるいは右のQRコードからアクセスしてください。（3月31日まで）

読むことの楽しみを全ての子どもたちに　　南アルプス市立落合小学校

「子どもの読書活動の推進に関する法律」では子どもの読書活動を，『子どもが言葉を学び，感性を磨き，表現力を高め，想像力を豊かなものにし，人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないもの』と謳い，国を挙げて読書活動を推進しています。山梨県においても，「山梨県子ども読書活動推進実施計画」が策定され，社会全体で子どもの読書活動を推進していく取組が行われています。そんな中，南アルプス市立落合小学校でも，子ども達が読書習慣を形成し，読書への関心を高めていくためのさまざまな活動が行われています。その一つが児童による図書の紹介です。子どもたちはそれぞれ自分が読んで面白かった本，友だちにも読んで欲しいと思う本を，「わたしのおすすめの本」という形で紹介しています。例年はそれらを校内に掲示し，児童だけでなく学校を訪れる家族や地域の方々とも共有してきましたが，今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から，校内ではなく学校ホームページに掲載するという取組を行いました。学校ホームページに学年ごとに掲載された「児童おすすめの本」はイラストつき，本の内容やおすすめの理由がよく分かる構成となっており，学校の全家庭数を超えるアクセス数が記録されるなど，家庭で家族一緒に読む本を決め読書を楽しむ際の参考となり，家族の絆の深まりを目指す家読（うちどく）の充実につながっているといいます。批判的思考力や，自己肯定感，意欲などに加え，コミュニケーションスキルや礼儀などマナーの向上にも大きな影響を及ぼすとされる読書活動。その生涯にわたる習慣の形成のために，家庭と連携しながら学校全体で子ども達に本や読書に親しむ機会を提供し，子どもたちの読書意欲を引き出している様子がうかがえました。





あけぼの支援学校小学部と甘利小学校の交流及び共同学習
～「共に生きる」とは～

山梨県立あけぼの支援学校
韮崎市立甘利小学校

山梨県立あけぼの支援学校と韮崎市立甘利小学校の交流及び共同学習は，今年度で３２年目となります。しかし，令和２年度はコロナ禍のもとこれまでと同じような交流ができず，両校は，どのような交流及び共同学習ができるのかを模索したそうです。交流及び共同学習では，「密集」「密接」がつきものだからです。模索するなかで出てきた方法が，間接交流でした。例年，直接交流を行うときの事前事後学習として行ったり，インフルエンザなどの感染症が流行して直接交流ができないときに間接交流を行っていました。今年度は，直接交流がないという前提で行う間接交流をしてみようということになりました。今回は，あけぼの支援学校と甘利小学校の５年生の交流を取材しました。甘利小学校の５年生にとっては，３年生の時に行った交流から２度目の交流です。

あけぼの支援学校から甘利小学校へ

音楽室に集まった５年生の前に登場したのは，あけぼの支援学校の佐々木先生でした。佐々木先生は甘利小学校の５年生に向けて，「『共に生きる』とはどういうことか，５年生でできることはどんなことか，自分なりに考えてください。気になったところはどんどん質問してください。」「あけぼの支援学校はどんな学校かな？学校の様子を見てみましょう。」と声をかけ，対話しながら，進めていきました。「肢体不自由というのは・・・」と，あけぼの支援学校の児童がどんな様子なのかを，甘利小学校の児童にわかりやすい言葉でとても丁寧に説明してくれました。続いては，あけぼの支援学校の児童からのビデオレターです。小学部の１年生から６年生までの児童が一人一人，楽器を鳴らしたり，先生の呼名に答えたり，好きなものなどを教えてくれたりしました。自分のことを伝えたいというあけぼの支援学校の児童の気持ちがしっかり伝わっていることが，甘利小学校の児童がビデオに見入る様子からわかりました。

「交流はなぜするのか」→「共に生きる社会をつくるため」→「共に生きる社会ってどんな社会だろう」→「どんな人も暮らしやすい社会，それが共に生きる社会」→「そんな社会をつくるためには，『相手のことをよく知る』『自分のことをよく伝える』『困ったことがあったら助け合う』ことが大切」と，話はどんどん深くなっていきました。

佐々木先生のお話を聞いたり，あけぼの支援学校の友だちのビデオレターを見たりした甘利小学校の５年生の児童は，交流する友だちの好きなものや体の状態等の情報をもとにプレゼントをつくり，あけぼの支援学校の友だちに贈りました。甘利小学校の児童のあるグループは，「鈴が好き」という交流の友だちに，その友だちの体の状態を考えながら，取っ手を持ちやすく工夫した鈴を，数種類つくってプレゼントしていました。遊んで楽しんでほしいという思いがたくさん詰まっていました。

あけぼの支援学校の児童

オンラインでつながり，甘利小学校の友だちの顔が画面に出た瞬間，画面に見入っていました。甘利小学校の友だちの呼びかけにうれしそうに答えたり，プレゼントで遊んだりしていました。「～がすきです」「～にはまってます」という甘利小の友だちの自己紹介に「ぼくもです」「見てる方が好きです」などと楽しそうに答えていました。間接交流であっても，双方向でのやりとりを通じて，短くてもとても充実した時間となりました。

甘利小学校の５年生

オンラインでつながる直前，タブレットの前でわくわくしながらも緊張して待っていました。贈ったプレゼントの説明では，どんな思いでつくったのかが伝わるように伝え方を工夫していました。プレゼントした楽器と同じものを用意して，オンライン上で一緒に楽器をたたいたり歌を歌ったりするグループもありました。「リモートでも会えてよかった」「直接会えないけど，プレゼントして思い出になってくれればうれしい」などの感想を聞かせてくれました。

地域教育「出前授業」
～昭和町風土伝承館杉浦醫院～

中央市立田富南小学校

昭和町にある「風土伝承館杉浦醫院」の出井寛館長が，中央市立田富南小学校で４年生の児童への出前授業を行いました。地域の人々を襲った地方病についての授業でした。

【出前授業の内容】

地方病（日本住血吸虫病）は，

・どんな病気

・どうやってやっつけたのか

・いつ終わったのか

出井館長は，まず「この病気の名前をしっかり覚えてほしい。」と，「日本住血吸虫病」と書かれたフリップを持ち，「君たちのおじいちゃんやおばあちゃんに，『知ってる。』って是非聞いてみて。」と力強く話し始めました。

出井館長は，虫かごを持ち込んで児童に問いました。「この中に入っているのは何だと思う。」児童は，興味津々。数人ずつ，虫かごの中のものを観察しました。

児童は，原因となった虫１匹が１日に産む卵の数，虫の写真，おなかが大きくなってしまった患者の写真，おなかが大きくなる理由等々，見たり聞いたりすることに驚き，授業が進むにつれ興味・関心が高まっていく様子が見られました。

出井館長は，「病気の原因となった日本住血吸虫は，どうやって人間の体の中に入っていったのだろう。自由に考えてみて。」などと所々で児童の自由な発想で考えさせていました。さらに，「どうやってミヤイリガイをやっつけたんだと思う。ヒントは・・・。友だちと考えてみて。」と，児童同士が自分の考えを交流する場面もありました。

「日本住血吸虫病」がどんな病気であるかとともに児童が学んでいったのは，どうやって撲滅したのかに現れる地域の人々の苦しみや子孫への思いでした。病気の原因がわからないために薬がなく，病気によっておなかが大きくなれば諦めるしかないという家族や身近な人々のつらさや，原因解明のために自分の解剖を申し出た人のこれ以上子どもや孫達につらい思いをさせたくないという強い思いなどに児童は触れていきました。

出井館長は，「日本住血吸虫病」が見つかってから，平成８年の終息宣言が出されるまでに１１５年という，ものすごく長い戦いだったことを児童に話し，「日本には確かにこの病気はなくなったけれど，世界にはまだまだたくさんあるんだよ。」と児童の目を世界に向けさせ，この授業を終えました。

出井館長は，令和２年度に，風土伝承館杉浦醫院がある昭和町内の見学に来られなかった小学校１校と，中央市のなかでこの地方病に苦しめられた地域にある５つの小学校に出前授業に出かけました。風土伝承館杉浦醫院へ見学に来てもらえることは大歓迎で，出前授業も要請があればどこにでも出かけていくとのことです。

終わるまでに１１５年も長くかかったことに驚いた。今のコロナウイルスもこんなにかかるかもしれないと心配になってしまった。

児童の感想の一部

現在の状況と結びつけて考えたり，授業の前から興味をもって家族と話し合ったりと，この授業によって深い学びをしている児童の様子が見られました。

昨日父に地方病の授業があることを言ったら，父の祖母が地方病にかかって治ったけど，がんになって死んでしまったと聞いて，治っても爪痕が残ることが残念。

日本住血吸虫駆除の方法の１つ
火炎放射器